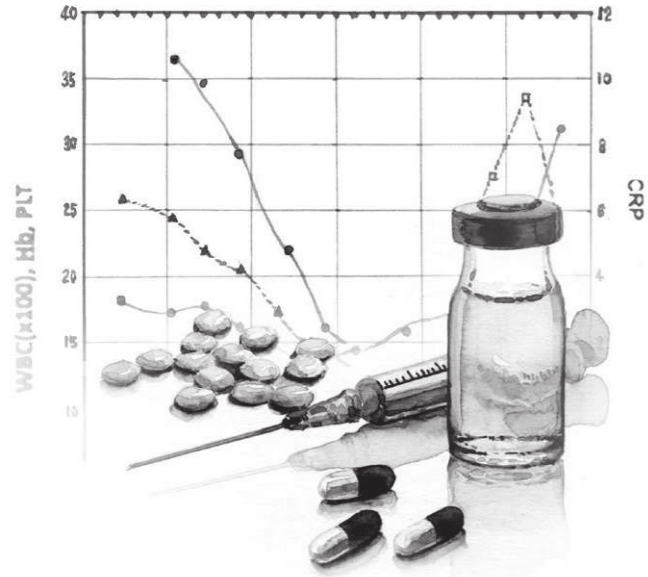


※イラストはイメージです。



Special Interview

角山 香織 准教授
大阪薬科大学[臨床薬学教育研究センター]

かどやま・かおり 1998年金沢大学大学院薬学研究所修士課程修了。2009年、京都大学先端技術グローバルリーダー養成ユニット特定助教、同大学大学院薬学研究所統合薬学教育開発センター助教などを経て、16年から現職。

医療フロントライン

Frontline Medical Care

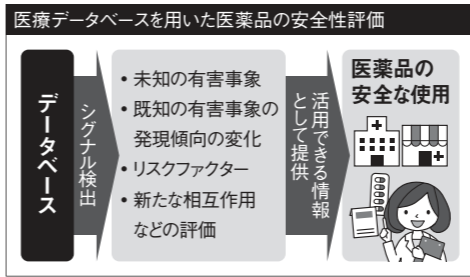
医薬品の副作用ゼロの日へ

大阪薬科大学の臨床薬学教育研究センター、角山香織准教授が向き合うのは、医薬品の適正使用だ。本来は疾患を治療するはずが、副作用などで体調を崩す原因となったり、最悪の場合は命に関わったりする。データを駆使して、安全な医薬品の使い方を探っている。

医療データベースを統計的に分析し リスク要因読み解く

医薬品による有害事象の発生事例は、データとして蓄積されている。その件数は米国で500万、日本でも数十万件に上る。「データベースの特徴を理解して活用すれば、それまで分からなかった重篤で稀(まれ)な有害事象を検出する重要な情報源になります」。角山はこうしたデータベースを足がかりにして、どうすれば医薬品のリスクをゼロに近づけることができるのか、日々考えている。

「年齢や性別、体格、あるいは患者個人の体質に起因するものなのか、様々なリスク要因や傾向を、統計的にみていきます」。そう聞くと、パソコンや書類に向かい合う姿ばかり想像してしまうが、角山の日常は全く異なる。頻繁に医療機関を訪ね、医師や薬剤師とコミュニケーションをとる。「この薬を使っていると、肝機能が悪くなる患者さんが多いような気がする」「この薬が効きにくい人には、共通点がありそうだ」。臨床現場が抱く漠然とした疑問をとらえ、データベースを駆使して仮説を生み出す。さらに、プライバシーに支



障のない範囲でカルテ情報などを提供してもらい、立てた仮説を補強、検証する。その積み重ねが、医薬品の安全性を少しでも高める一歩だと信じている。

「使用実績の多い薬だからといって、安全だとは言いきれません。これまで重篤な副作用がなかったとしても、目の前の患者に起こる可能性はあります」。重いアレルギー症状などが起されれば、命に関わることもある。だからこそ油断せず、小さな変化も見逃さない。膨大なデータの向こうに、常に患者の姿をとらえている。

大病院の薬剤師として10年以上勤務した角山は、臨床の場で、医師や看護師らと、医薬品の使用について議論を重ねてきた豊富な経験を持つ。大学教員となった

今でも、医薬品を適正に使用するために活用できる情報を、臨床現場に還元すべく奮闘している。

医療の最前線に立つ 薬剤師に情報提供し 健康な生活を守る

医薬分業が進み、薬剤師は病院、薬局それぞれの立場で、薬学的視点から、患者をサポートすることが強く求められるようになってきた。薬のリスクを最小限に抑え、最も望ましい治療効果が得られるよう、様々な情報を評価、取捨選択して、医療スタッフや個々の患者に正確に伝えることが、薬剤師が担うべき役割。「だからこそ、安全に医薬品を使うため、できるだけ信頼できる情報を提供して、広く活用してもらいたいです」。角山が研究に打ち込む動機だ。

軽い体調不良なら、医師の診察を受ける前に、市販薬を使用する人も多いだろう。薬局の薬剤師は、健康をサポートする存在ともいえる。「健康な人生を送るための伴走者として、的確にアドバイスできる存在であってほしい」。角山が作るデータは、後ろに続く薬剤師へのプレゼントでもある。